

子どもたちの笑顔が地域社会の活力に



音楽で夢と未来を紡ぐ 相馬子どもオーケストラ

エル・システマジャパン(菊川穰代表理事)が、東日本大震災の被災地・福島県相馬市で展開する相馬子どもオーケストラとその演奏会を取材した。相馬市をはじめ各地方自治体の協力のもと、子どもたちに音楽を通じて生きる力を育む活動。熱心な指導者や楽器店の修理専門職人、ボランティア演奏家のサポートを得て、子どもたちは仲間と共に伸び伸びと成長し、地域の活力にもなっている。(小野寺)

のほか、長野県駒ヶ根市、東京で子どもオーケストラ、子どもコーラス等の活動が行われており、子どもたちは仲間と一緒に音楽を学びながらたくましく成長すると共に、音楽を通じた地域の活性化にも繋がっている。

相馬市では、エル・システマジャパンの発足後に協定を結び、指導者らの協力を得て、2013年に週末弦楽器教室がスタートした。次第に参加者が増え、今では小学2年生から高校3年生まで、59人が参加する相馬子どもオーケストラに発展。同音楽祭は、その子どもたちの言わば晴れ舞台であり、2015年から毎年開催されている。

初日は地元の中村第一、中村第二

学校、向陽中学校の吹奏楽部が合同でステージに立ち、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』から「彼こそが海賊」、東京スカパラダイスオーケストラとさかなクンのコラボで話題となった「Paradise Has No Border」で、学校の垣根を超えた息の合った演奏を披露。

続いて登場した相馬子どもオーケストラは、グリークの組曲「ホルベアの時代から」、今回の目玉といえるムソルグスキーの大作「展覧会の絵」、ペートーヴェンの「交響曲第7番イ長調作品92」と、難曲にも臆せず果敢にチャレンジ。見事なアンサンブルを聴かせ、アンコールの「ラデツキー行進曲」では、会場一体となって手拍子が沸き起こっ

た。翌日は相馬子どもコーラスによる合唱と同オーケストラの共演。チャイコフスキーの「弦楽セレナード」、「アヴェ・ヴェルム・コルプス」などを堂々と披露して、2日間にわたり日頃の練習の成果を存分に発揮した。

指導者や楽器店が積極支援

毎週のレッスンや演奏会等の活動を支えるのは、エル・システマジャパンの音楽監督や相馬出身の音楽教室講師など。このほか、弦楽器指導を補佐するフェローは現在27名を数え、プロの演奏家や社会人、学生らが、ボランティアで子どもたちの演奏指導や運営サポートにあたる。

バイオリンを指導する須藤亜佐子先生は、南相馬市で個人のバイオリン教室を開き、子どもたちを教えていたが、震災によって状況は一変。避難を余儀なくされた。そんな中エル・システマジャパンの菊川代表理事と出会い、その活動をサポートするため相馬市で子どもオーケストラの指導を開始した。

「子どもたちは時間のある限り自らすすんで練習してきました。その頑張りがあって、難しいと思われる曲でも、子どもたちの力を信じてなんとか形にすることができました。音楽を通じて子どもたちに一番伝えたいのは、諦めない心です。どんな曲でも、諦めずコツコツと練習すれば弾けるようになる。

音楽で生きる力を育む

東日本大震災の被災地の子どもたちを支援するため、2012年3月に設立された一般社団法人エル・システマジャパン(菊川穰代表理事)が相馬市、相馬市教育委員会と共催した『第4回エル・システマ子ども音楽祭in相馬』が3月17日と18日、相馬市民会館で開催された。

地方自治体の協力のもと、音楽を

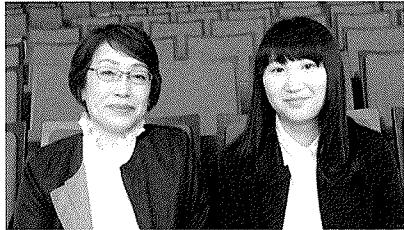
通して生きる力を育む。事業を展開するエル・システマジャパン。その活動の礎となっているのは、約40年前にベネズエラで始まった音楽教育プログラム「エル・システマ」である。家庭の経済状況や障害の有無に関係なく、どんな子どもでも無償で音楽レッスンに参加できる独自のプログラムは、今では世界70以上の国や地域で展開されている。日本では現在、震災で大きな被害を受けた福島県相馬市、岩手県大槌町



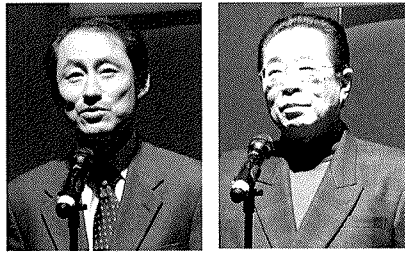
合同演奏した向陽中学校、中村第二中学校、中村第一中学校それぞれの吹奏楽部の部長は、「他の学校の子と一緒に演奏でき刺激になった」と楽しそうに語った



地元中学3校の合同バンドによる演奏。部員が少なくパートが揃わない学校も、大きな音で演奏できたと大満足



須藤亜佐子先生（左）と佐藤花音さん



エル・システムジャパン 相馬市の立谷秀清市長の菊川稔代表理事



相馬こどもコニラス&オーケストラ、相馬合唱団エスポワールの総勢200名以上による大合奏でフィナーレ（※）

※の写真は©FESJ/2018/Mariko Tagashira



練習や本番には欠かさず参加。ニコニコと優しい笑顔で子どもたちを見守る後藤賢二氏（※）

ズルしたら結果は出ない。そういったことがエル・システムのレッスンを通じて自然に学べていると思います。学校の授業で楽器に少し触れて終わりではもったいない。これからも歩みを止めず、この相馬で、演奏に親しむ子どもたちの裾野を広げる活動を続けていきたいですね」と須藤先生。今回演奏された「展覧会の絵」は、子どもたちの頑張りで、およそ3か月ほどで仕上がったというから驚きだ。

子どもたちが使う楽器は、ほとんどが寄贈もしくは支援目的で集められた資金で購入されたもの。当然メンテナンスは欠かせないが、それを一手に引き受けているのが、地元で相馬市を拠点に原町、亘理町の店舗と音楽教室を展開するオアシス楽器店の後藤賢二氏。長年の学販営業で培った経験とリペア技術で、毎週の練習には必ず付き添い、子どもたちが弾きづらそうにしていな

いかな常に目を配る。楽器や弓に何かあればすぐに対応してくれる心強い存在である。

「震災で親戚や知人を亡くした子もいます。避難で友達とも離ればなれになってしまい、子どもたちは元気を失くしていました。弦楽器のレッスンを始めるようになって夢中になれるものが見つかり、子どもたちにも笑顔が戻ってきたんです。

主な作業は弓の貼り替え、弦の交換、駒の修理、あとは日頃の調整ですね。本番直前にも駒や魂柱が倒れたりしますから、演奏に支障のないよう常に気を配っています。

小学校入学と同時にレッスンを始めた子が、数年で驚くくらい上手くなるんです。その成長を見るのが一番嬉しいですね。子ども達に楽しく練習してもらい、音楽をもっと好きになって欲しい」と後藤氏は目を細める。こうしてさまざまなサポートを得て実現したオーケストラの活動を通じ、子どもたちは次第に希望と明るさを取り戻している。

週末弦楽器教室のスタート当初、中学2年生の時からレッスンに参加し、今年高校を卒業、今春入学する大学では音楽科を専攻するという佐藤花音さんは、「エル・システムのレッスンを通じてたくさんの人と出会い、いろいろな音楽に触れることができたのが一番楽しかった。将来はこの相馬で、い

つも笑顔で指導してくれる須藤先生のような、頼れる指導者になりたい」と夢を語ってくれた。

継続と拡大で地域に活力

エル・システムジャパンのこれからについて菊川代表理事は、「被災地だけでなく、希望するすべての子どもが音楽を通して生きる力を育み、誰もが包摂される社会を実現できるように、今後三つの枠組みで活動を継続・拡大させたいと考えています。地域社会にとっての誇りで活力の源泉となるオーケストラやコーラスの活動。学校の部活動を補完する地域の音楽教室。そして、様々な障害を持つ子どもたちが主体的に相互的に参加できるホワイトハンドコーラスです。温かく見守って、末長く応援いただければ幸いです」と語る。

相馬市では昨年7月から、新たにフルート、オーボエ、ファゴット、ホルンの管楽器教室がスタートした。大槌町、駒ヶ根市の子どもオーケストラも参加者は増え続けているが、さらに活動を広げていくためには、やはり指導者の存在が不可欠。子どもたちが伸び伸びと練習し、演奏活動を通じて夢や目標を育むためにも、業界内外からのサポートが期待されるところ。各地で着実に音楽演奏人口を広げている取り組みだけに、次回は他の地域についてもご紹介していきたい。